

周恩来なき中国と今後の日本

〈中〉

東京外大助教授 中嶋嶺雄

現代の中国では共産党の二元化指導のもと、毛思想解体化の建前をとっている。そのなかで周恩来哀悼の勢力があること自体、深刻な問題だ。これは一方

つ、という立場から政治を、私物化している。こんな不安や危惧(きん)の念を抱いていたのではなからうか。その背後に

重なる真実が公開されている。毛沢東と江青の関係は当時、党内でも問題になり、周恩来や康生らが仲に入り、最終的には二人の関係を認めることになった。このとき江青夫人は「将来、どんなことがあっても政治に口をはさまない」との札を入れたという。これも「延安日記」に

でもなく、すべて毛主席の側近だった人たちが、人間的、感情的(えんじ)恨みによって政治が動かされる場合、ある日突然、数万の人が集まることはない。数万人の人は、いくつものスローガンを用意していた。すでに名

チラつく江青批判

天安門事件は痛烈な皮肉

まで「東方紅」なき、毛沢東主席をたたえる歌ばかりを歌っていた民衆が、周恩来を悼む形で「インター」を大合唱した意味は、決して小さくない。天安門事件では毛沢東批判がほのめ

チラつくのが毛沢東夫人の江青である。天安門事件は、まず走資派批判の背景として周恩来の存在があり、第二に、これと関連して毛沢東体制についての批判が含まれている。第三は

澤東らしいといえる言えるわけ、革命根拠地でも第三夫人の日の江青女史は大変な美人で、最近、ソ連で刊行され、話題に

抑して批判されていた鄧小平と走資派に、あたかも味方するべく大衆が裏切った事実を直視すべきであろう。(第六十八回四国政経懇話会

周恩来首相は国家的使命感に燃え、粉骨砕身、中国のために尽くした、という見方が圧倒的だった。これに対し、現在の政治をみると、文革派の人たちが毛思想の「解釈権」を奪

江青女史に対する批判が出はじめたことだ。中国人民がはつきりし、楊開慧をのぞくローカ

ことば、うがったことであり、江青夫人に対する痛烈な批判が込められていると思う。走資派の名を出すことによつて、毛沢東の在り方と、江青に批判を投げかけたことは無視できない。

から)



鄧小平追放処分を支持して、8日朝、北京天安門前広場で行われた支持デモ

